

書評: Charles Willemen, Bart Dessein, and Collett Cox: *Sarvāstivāda Buddhist Scholasticism*

Martin Delhey (著) 藤本庸裕 (訳)

古代インドにおける仏教の学術的営為 (Scholastik)、すなわちアビダルマ (Abhidharma) を取り扱う諸学派のうち、説一切有部 (Sarvāstivādin) の系統はとりわけ重要な立場を保持したことで広く知られている。この極めて複雑な分野に関する我々の知識は未だ完全には程遠く、多くの事柄が未解明のままである。だが、この説一切有部のアビダルマを主題とする今日に至るまでの膨大な数の二次文献を目の前にすると、現在の研究状況を一冊の概説書にまとめようとする試みが本書によって企てられたことは非常に歓迎すべきものであると言えよう。

最初に Willemen によって簡潔な序文と導入が著された後、まず第一章において Dessein がアビダルマの前史と初期の歴史を概説する。続けて Dessein は「説一切有部」 (Sarvāstivāda) という概念について略述し、説一切有部に属する文献の分類を簡潔に示した後、この学派に関する二、三の中心적인見解を詳述する。第二章において Dessein は説一切有部の歴史を一般的な歴史の文脈の中にはめ込む形で記述しようと試みる。Cox が執筆した第三章と再度 Dessein が担当した第四章は、それぞれカシミールの毘婆沙師たちの正統説とバクトリアとガンダーラの説一切有部を取り扱っている。本書の末尾には参考文献一覧に加え、詳細で利用

価値の高い二種の索引が付属している。喜ばしいのは、Dessein も Cox も関連するあらゆる学術言語で書かれた二次文献を幅広く利用していることである。しかし、Dessein と Cox の論考は見たところほとんど相互に関係なく書かれており、残念ながらその質において相当の隔りがある。

Dessein は自身の論述の中で説一切有部とその分派の同定に関して極めて恣意的な図式を描いている。詰まるところ、Dessein の議論では、マトゥラーに起源する、根本説一切有部 (Mūlasarvāstivādin) の律を用いる学派と、カシミールの範囲外、とりわけ西方を拠点とする説一切有部、そして経量部 (Sautrāntika)、この三者が事実上同一視されるのである (124 頁以下および 108 頁。88 頁以下および 277 頁を参照)。Dessein の見解によると、この全く多様でありながらも常にカシミールの説一切有部とは区別される思想的潮流こそが、本来の説一切有部であるという (124 頁、277 頁を見よ)。Dessein は七論典以降に述作された説一切有部の大部分の論書^①のみならず (例えば 124 頁以下および 108 頁を見よ)、さらに——Dessein によれば——後にカシミールの説一切有部によって「論蔵」 (Abhidharmapitaka) として纏められたとされる諸論書の原型までも、この思想的潮流に帰属するものと見なす (80 頁を見よ)。このような Dessein の見解には、これまでの研究に基づく最新の知見を伝える意図は微塵も見られない。以下、Dessein が自身の主張を説得的に証明できていない例をいくつか指摘しよう。

Dessein は『法蘊論』 (Dharmaskandha) の起源を根本説一切有部に帰している——Dessein の主張に反して、彼が挙げる Dietz の論文において Dietz はそのような主張を行っていない——が、これは、『法蘊論』のギルギット出土写本の断片の中に根本説一切有部の『増一阿含』

(Ekottarāgama) の引用が含まれているという理由に基づいている (70 頁)。しかしながら、どうしてこのギルギット出土の『法蘊論』——少なくとも漢訳の『法蘊足論』とは相違している (本書の 182 頁の Cox による説明を見よ) ——が『法蘊論』の祖型テキストであると断定できるのか、その根拠を Dessein は明かさない。さらに Dessein は、『法蘊論』とその他の論蔵の論書、そして西方の説一切有部に帰属するとされる、いわゆる心論 (Hṛdaya) 系論書^②と世親 (Vasubandhu) の『俱舍論』 (Abhidharmakośabhāṣya)、これらの論書はいずれも「偈頌 (kārikā) の集成とその注解」から成っているという理由により、そこに近縁性を見出している (108 頁を見よ)。こうした特徴付けは、聖典としてのアビダルマ論書、すなわち七論典に関する限り (七論典の構成——および上に挙げた他の論書における、七論典とは全く異なる形式——については本書 171 頁以下の Cox による説明を参照)、全くの誤りである。さらに、上述の見解を示した Dessein は、心論系論書と『俱舍論』はいずれも「『経量部・譬喩師』 (Sautrāntika-Dārṣṭāntika) という概念が具現化したものである」 (108 頁)、あるいは単に「経 (sūtra) として著されたものである」 (124 頁) という、まさにそれ自体が短絡的とも言える結論を導き出す。これとは別に、Dessein は他の箇所 (68 頁以下) で『法蘊論』を「説法の集成」、あるいは「経の集成」と見なした上で、『法蘊論』はガンダーラのアビダルマに特有の形式である「経の形をした論書」であるとも説明している。しかしながら、Dessein がここで念頭に置いていると思われる心論系論書は、どう見ても仏陀の教説の集成ではない。Dessein は明らかに「偈頌」の概念と「経」の概念を混同し、この曖昧な理解に基づいて議論を展開しているのである。また、Dessein は『入

阿毘達磨論』 (*Abhidharmāvatāraśāstra) を経量部に帰属せしめているが、この論書で採用されている哲学的立場は明らかに経量部の立場とは異なるという事実を無視している¹。

特に腹立たしく思われるのは、Dessein の説明が上述の問題とは関係のない場合においても誤った情報を含み、その頻度が許容できる限度をはるかに越えていることである。例えば、Dessein は説一切有部の解脱の体系において中心的な役割を果たしている随眠 (anuśaya) を纏 (paryavasthāna) の集合と混同していたり (31 頁と注 150、77 頁)、三十七の「菩提分法」 (bodhipakṣyā dharmāḥ) を繰り返して「覚支」 (bodhyaṅga) と誤って呼んでいた (例えば 11 頁、12 頁、18 頁)、あるいは根拠や参照文献を示すことなく、チベット語訳の『根本説一切有部律』 (Mūlasarvāstivādinaya) は「もしかすると漢訳から」重訳されたものであるという奇妙な説を唱えていたりする (10 頁)。形式面においても重大な欠点が見られる。Dessein はしばしば当該の文献の校訂テキ

¹ この点については M. van Velthem, *La traité de la descente dans la profonde loi ...*, Université Catholique de Louvain, Institut Orientaliste, Louvain-la-Neuve 1977 の XIII 頁を参照。Dessein は文中にて van Velthem の書に記される情報を引いてはいるものの、自身の見解に反する van Velthem の主張は無視している。『入阿毘達磨論』の中で一度だけ毘婆沙師 (Vaibhāṣika) が明確に論駁されていることなどを理由に、Dessein は同書が経量部に帰属すると主張する。しかし、van Velthem の所見 (同様に上掲箇所を参照) を読むと、当該の箇所におけるチベット語訳は毘婆沙師に言及していないということが分かるのだが (前掲書 20 頁の注 23 も見よ。ここは Dessein も言及している箇所である! [285 頁の注 169—訳者注])、ここでも Dessein は van Velthem の記述に気付いていない。残念ながら、これは Dessein の二次文献の取り扱い方によく見られることなのである (Dietz の研究成果を不正確に言及している点については、同じく上述の本文参照)。以上の議論に用いた Dessein の一節にはその他にも多くの誤りが含まれている。

ストの著者名と刊行年によって一次文献に言及しながらも（例えば 2 頁の注 5、270 頁の注 81）、その文献は参考文献一覧において本文中では決して言及されなかった書名で配列されているのである。

Cox の執筆した章を読むと、全く違った結論に至る。Cox はアビダルマ文献の歴史に関して明解かつ極めて有益な情報に富んだ記述を行っている——それ故に、十分に注意して Cox の論考を読めば、初期の文献についても、我々は少なくともその発展の次第の概略を知ることができる——が、これに先立ち、方法論上の問題について詳細かつ徹底的な検討を加えている。こうした問題を検討する出発点となっているのは、とりわけ、七論典が本来有していた性格は何であったのかという疑問——Cox によると、それらは「教説の朗唱から生じた流動的な作品」、すなわち絶えず内容が変化するもの、絶えず内容を変化させるものであったのではないかという（167 頁）——であり、そして、ある一般的な前提——Cox はこうした前提の中に例えば「単純なものは必ず複雑なものに先行する」（168 頁）という前提を含める——は妥当であるか否かという疑問である。というのも、諸論書、あるいはその一部分を文献内部の基準に基づいて年代順に配列する作業は必然的にそのような前提に依拠するからである。方法論に関する Cox の疑念についてどの程度従おうとするにせよ、その慎重な研究方法は非常に望ましく、Cox の討議は必ず読んでおかななくてはならない。また、Cox が長い議論を終えた後に下す次の結論は一考に値する。すなわち、あるアビダルマ論典、または毘婆沙論綱要書の一部が、いずれの地域や学派に起源するのかという問題に関して早まった仮説を立てたとしても、それによって状況の複雑さを解明することはできないであろう（159 頁）と。この見解は

Dessein の叙述にも十分に適用できる（上記参照。具体的な事例については、『発智論』（Jñānaprasthāna）の諸本に関する Dessein と Cox の見解の相違、74 頁以下と 155 頁以下をそれぞれ参照）。

本書に収められた Cox の論考は卓越しており、全編にわたって用いられている資料も充実している。しかし、Dessein の執筆した章に上述の欠点が存在するため、本書は全体として概説書に求められている要件を満たしているとは言えない。残念ながら読者はそのことに留意しておかねばならない。もちろん、執筆の分量が多く、取り扱う主題も多岐にわたるが故に、まさに Dessein は極めて困難な課題に直面させられていたということも忘れてはならないであろう。

<訳者注>

- ① 原語は *der postkanonischen Werke*、直訳すれば「聖典以後の作品」という意。英語やドイツ語の書物において、説一切有部の *canonical works/kanonischen Werke* という場合、それは通常、『集異門論（*Saṅgītiparyāya*）』、『法蘊論』（*Dharmaskandha*）』、『施説論』（*Prajñapti*）』、『識身論』（*Vijñānakāya*）』、『界身論』（*Dhātukāya*）』、『品類論』（*Prakaraṇa*）』、『発智論』（*Jñānaprasthāna*）の七つの論書を指す。伝承の違いによって、各論書の名称と扱い方はやや異なるものの（木村誠司「いわゆる六足発智についての報告」『駒澤大學佛教學部研究紀要』77, pp. (1)–(10)を参照）、説一切有部の内部において、これら七つの論書は内容上仏陀の所説と見なされ、経蔵と律蔵と同じような権威を有する聖典、すなわち「論蔵」（*Abhidharmapitaka*）として扱われている。しかしながら、日本語で仏教の「聖典」と言う場

書評: Charles Willemen, Bart Dessein, and Collett Cox: *Sarvāstivāda Buddhist Scholasticism*
(Martin Delhey 著・藤本訳)

合、一般的にそれは大蔵經に収められている全ての典籍を指し、故に説一切有部において聖典としての權威を持たない綱要書なども「聖典」と呼ばれ得る。そのため、canonical works/kanonischen Werke を単純に「聖典としての [アビダルマ] 論書」、あるいは「アビダルマ聖典」などと訳すと、上記の七つの論書とそれ以外の論書の区別が付かなくなってしまう。このような事情により、kanonischen Werke とこれに関連する語は、具体的に上記の七つの論書を指す「七論典」の語を用いて訳出した。

- ② 「心論系論書」とは、書名に「心」 (hrdaya) の語を有する説一切有部のアビダルマ綱要書を指す。現在これには『阿毘曇心論』、『阿毘曇心論經』、『雜阿毘曇心論』の三つの論書が漢訳されて伝わっている。

<訳者付記>

本稿は、山東大学の Martin Delhey 教授によるドイツ語の書評 "Charles Willemen, Bart Dessein, and Collett Cox: *Sarvāstivāda Buddhist Scholasticism*. Handbuch der Orientalistik, zweite Abteilung: Indien; elfter Band. Brill, Leiden - New York - Köln 1998," *Orientalistische Literaturzeitung* 94.4-5 (1999), pp. 560-563 の日本語訳である。Delhey 教授はインド仏教の瑜伽行唯識学派を主な専門とし、中国学とサンスクリット写本学にも幅広く通じている世界的に稀有な学者である。この書評において取り上げられた *Sarvāstivāda Buddhist Scholasticism* は、説一切有部の思想と歴史を記した英語による数少ない概説書の一つであり、欧米圏では今もなお主要な参考文献として用いられている。しかしながら、Delhey 教授も述べられて

いるように、関連する研究を網羅的に記している点で非常に有益な書であるが、Bart Dessein の担当した章には問題点が少なくない。これについては、Oskar von Hinüber によるドイツ語の書評（Oskar von Hinüber, "Charles Willemen, Bart Dessein, Collett Cox: *Sarvāstivāda Buddhist Scholasticism*," In *Oskar Von Hinüber. Kleine Schriften Tiel II*, ed. Harry Falk and Walter Slaje, Harrassowitz Verlag 2009, pp. 942–945）と福田琢による日本語の書評（福田琢「（書評） Charles Willemen, Bart Dessein, and Collett Cox: *Sarvastivada Buddhist Scholasticism*」『佛教學セミナー』71 (2000), pp. 37–51）があるので、そちらも参照されたい。

本書評の翻訳を快く許可して下さい、日本語訳に対して適切なコメントを下された Delhey 教授に謝意を表す。また、日本語訳に目を通して頂いた山部能宜先生にも謝意を表す。